

# 当日ブリーフレポート方式（BRD）による講義に 関する研究（3） -- 他の講義方式との比較を中心に

宇田 光

南山大学総合政策学部

当日ブリーフレポート方式（BRD）は、筆者が考案した講義手順である。名前の示す通り、講義の当日（時間内）、受講生に簡単なレポートをまとめてもらう。講義の冒頭でテーマを発表し、90分間で簡単なレポート（A4版の用紙1枚）を書くよう求める。このことで、学生の当日の授業における到達目標を具体化し、講義への注意集中度を高める。BRD方式における受講生の満足度や集中度は、ふつうの講義方式よりも有意に高いことがわかっている。従来の教師による説明中心の講義よりも、本方式のほうが効果的である。では、BRDは、講義改善の諸方法とどんな点が似ており、どんな点が違うのだろうか。本研究では、BRD方式とそれらの方法との共通点や相違点を整理する。このような考察をすることで、BRDの特徴がより明確になり、今後の大学授業改革の方向も見えてくるのではないだろうか。

## 1 感想や質問を書かせる方法

① BRDでは単なる「感想」ではなく、「レポート課題」としての記述を求める。つまり、学生により強い関与を求めているといえる。「レポート」という名称から、採点の対象となる課題であり、個人の責任で仕上げる必要があると明示しているのである。② 授業の感想は、講義の最後書いてもらうことになる。感想は事前には書けないから、当然である。一方、BRD方式では、冒頭の時間から書く準備作業（構想）を求め、最後に再び書くよう求めている。このことで、教師の説明や他の学生の意見への集中力の向上（覚醒効果）をねらっている。③ 成果の「一対一」での受け渡し。BRD方式では、個々の学生が行った知的な活動の具体的な成果としてレポートを尊重する。そして、これを教師は確認のうえ直接受け取り、次の回に必ず返却するという手順を踏む。

## 2 講義ノートの提出方式

両者はよく似ている。とりわけ、実際に個々の受講生が書いたもの（ノート、レポート）を元にして、理解度や授業への取り組み姿勢を知ろうとするところである。ただ、ノートは、教員の説明したことを忠実に記録したメモ、という性格をもつ。一方、BRDの内容は、ノートも参照しながら、自らの頭を使って考えて、論理的にまとめた文章である。ノートに比べて、多様性に富んでいると言える。また、用いられているノートは、学生によってそれぞれ大きさも違えば使い方も違う。このことは、提出や返却の際に混乱や不便を生じさせる原因となる。一方、BRDは統一された専用の書式を配布して用いる。そのため、提出や返却作業が円滑に進む利点がある。

## 3 小テスト方式

小テストを繰り返す方式は、BRDにかなり近い。形成的評価という観点からすると、小テストは優れた方法の一つである。個々の学生が、講義の後で、理解できたかどうか確認できる。ただし、①問題の事前作成（印刷）、②実施・回収、③採点して得点を転記、

④返却という一連の作業を、教員は毎週（あるいは小テストの度に）欠かさずに行うことになる。決して容易ではない。一方、BRDではこうした一連の作業が簡素化できる。①の問題作成は、BRDではテーマを決めるだけである。テスト用紙の印刷もする必要がない。②の実施段階も、BRDはテストではないので、楽な気持ちで臨める。③の採点だが、BRDでは毎回採点する必要はない。そのため、小テストと同様の効果をもちながらも、より実行しやすく、長続きさせやすい。また、相互の点検作業を組み込むことができるのも、BRDの長所である。

#### 4 P S I Personalized System of Instruction (個別化教授システム)

P S I は、1960年代にアメリカ合衆国の心理学者、ケラー (F.S.Keller) が開発した。BRDとは、「課題の具体化」「個別化」などに共通性がある。しかし、P S I は完全に個別学習をベースとしており、講義とは一線を画している。一方、BRDはふつうの講義（一斉指導）を改善するための手順であって、中に個別学習が組み込まれている。必ずしも、新たに人を配置する必要はない。むしろ、補助員があれば理想的ではある。また、P S I は講義の改革案としてはかなりドラスティックなものである。一方、BRDは従来の伝統的な講義の型を保ったままで導入できる点で、より抵抗感が少ないと考えられる。

#### 5 仮説実験授業

BRDは、仮説実験授業からも大きなヒントをもらっている。共通点も、次の二つある。第1に、「まず必要（興味）を生じさせる」というところである。つまり、BRDでは「私はレポートを完成しなければならない。しかし、手元にはたいした資料はなく、自分の知識だけではレポートを書き上げることは困難だ」と気づく。仮説実験授業では、「どれが本当の答えか。今の私にはよくわからない」と気づく。後は、その興味に沿って展開する。第2に、一定の手順、授業の流れがある。つまり、BRDでは、テーマの提示→構想→情報収集→レポート執筆。一方、仮説実験授業では、課題の提示→選択（個別の態度の表明）→討論→ヒントや補足的資料の提示→実験実演となる。

#### 6 G L P (Guided Lecture Procedure)

アメリカ合衆国の Kelly and Holmes (1979) が提案している。まずノートに書くことを禁じる約20分の講義時間、次にノート取り専用の時間帯を設定する。この後、小グループで互いに補い合って、ノートを完成する（10分から15分）。この間質問が出たら、教師は答えるか、学生たちが答えを導くよう手助けする。GLPとBRDとは、共通点がかなりある。①講義をいくつかの段階に区切って、それぞれを別の活動とする一連の手順であること。②個々の受講生が書く活動に専念する時間をもうけている。講義の後にノートを集中して書く活動を入れることで、講義に対する集中度を高めていること。逆に違うところとしては、①GLPではノートを用いること（BRDでは専用のレポート書式）、②GLPには冒頭に「構想」段階がなく、目標提示後いきなり講義にはいること、③完成したノートを媒体として、授業中に討論をしようというねらいが前面に出ている。一方、BRDでは講義後にレポートを読んだ教師が、学生の理解度や考えを知ることが重視されている。④書くという活動を禁じる時間帯があること。BRDには、書くのを禁じる場面はない。

<文献> 中西良文・宇田 光 2003 当日ブリーフレポート方式による講義の効果(1) — 受講生の理解度・集中度についての実験的検討 大学教育学会第25回大会発表